

所功著

紹介

『近代大礼関係の基本史料集成』

国書刊行会 平成三十年八月 A5判 六八五頁 本体七〇〇円

践祚・改元・即位式・大嘗祭の諸儀は朝廷の実権が衰退した中世以降も国家の行事として続けられたが、大嘗祭は戦国時代に至り一旦中絶した。大嘗祭は、それから二百年後の江戸時代前期に復興した。近代の明治維新では、新天皇のもとで新政府による「王政復古の大号令」「五箇条の御誓文」などが次々と打ち出され、その「復古」と「革新」が改元・即位式・大嘗祭に関する制度にも反映していると編者は述べている。それは具体的に『皇室典範』と『登極令』附式によって法制化され、両法令に基づいて大正四年と昭和三年の大礼は実施された。本書は、近代大礼に関する史料を集大成した労作である。『戊辰御即位雑記』、『辛未大嘗会雑記』、『明治大嘗祭図』、『登極令大要』、『皇室典範義解』、『大礼記録』、『御即位大嘗祭絵巻』、大正度と昭和度の『大礼の要旨』、『倫理御進講草案』に所収の「御即位式と大嘗祭」などの史料を翻刻・紹介し、また『太政類典』所収文書、「福羽美

静草稿」、『阿波志料 践祚大嘗祭御贄考』（抄録）、『登極令』、『大礼記録』などを抄録または成立過程を解明した論考が収められている。また、高御座の来歴についての論考も収められている。『皇室典範』と『登極令』の両法令は戦後廃止されたが、昭和二十二年「従来の例に準じて」行う通牒が出ているので、近代的大礼は今後の皇位継承でも参考とされるに違いないと著者は指摘している。著者の述べるように「明治・大正・昭和の三代にわたる近代的大礼のもつ意義は、政治史的・文化史的にも極めて大きい」と考えられ、また昭和天皇の崩御に続く皇位継承の儀式は『日本国憲法』との整合性に配慮しつつ、大正・昭和の先例に多少の変更を加える形で実施されたことを考えても、今度の御代替わりを考える上で極めて重要であり、およそ「近代大礼」を研究しようとする者にとり必読の書であるといえよう。

近代大礼関係の基本史料集成

所功 著

近代大礼のエッセンスがここにあり！

本書は、明治・大正・昭和の三時代における大嘗祭・即位式・改元・践祚の儀式の成立過程を解明し、高御座の来歴についての論考も収められている。また、高御座の来歴についての論考も収められている。また、高御座の来歴についての論考も収められている。

浅見綱斎著・近藤啓吾訳注

〈講談社学術文庫〉

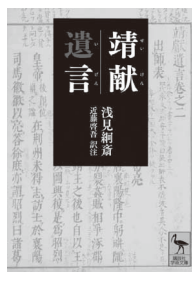
紹介

『靖献遺言』

講談社 平成三十年十二月 文庫判 五五七頁 本体一七九〇円

浅見綱斎の主著『靖献遺言』は、諸葛亮・文祥・天から中国の忠臣義士八人の遺文と評論を通して、道義に拠って屈せず、君命とあらば命も惜しまぬ強烈な在り方を伝え、幕末の志士に大きな影響を与えたのみならず、戦前・戦中に至るまで広く読まれた書物である。戦後、顧みる人も殆どいなくなり、入手に困難であったが、「明治百五十年」を契機にしてか、濱田浩一郎氏による現代語訳が刊行（晋遊舎、平成二十八年）されるなど、やや注目されている感がある。濱田氏の訳は一般向けの解説書であったが、ここに、ようやく『靖献遺言』の決定版とも言えるテキストが登場した。本書は、崎門（山崎闇斎学派）の学を現代に伝え、『靖献遺言』の研究に一貫して取り組んでおられた近藤啓吾氏（平成二十九年十二月二十五日、数え九十七歳で易簣された）が、昭和六十二年に刊行された『靖献遺言講義』（ただし平成四年増補版）を原版とし、皇學館大学教授の松本丘氏の責任において再編集したものである。

のである。講談社学術文庫の体裁に従って、原文の書き下し文・訳文・語釈・解説より成るが、とくに語釈は、綱斎自身による講義をはじめ、若林強斎・谷泰山・西依墨山の講義、落合東堤の書入れが随所に引用されており、崎門先学の講義に直接参入することができる。これは、「私意私見を以てすることを避け、……綱斎門流の先学の講義に本づいて、本書の意を闡明することに努力した」とする近藤氏の編纂態度に由来するものであり、訳文も単なる直訳ではなく、先学の講義を踏まえたものになっている。巻末の「浅見綱斎小伝」を読めば、『靖献遺言』編纂の志が奈辺にあるかを、たちどころに理解することができる。初めて本書を読まれる場合、まずこの「小伝」から読まれることをお勧めする。「明治百五十年」を経て、現代に蘇った『靖献遺言』から何を学ぶかは、近藤氏のアドヴァイスのとおり、「我等みづからの志のいかん」に係っている。



所功編著

紹介

『五箇条の御誓文』関係資料集成

原書房 平成三十一年一月 A5判 二四一頁 本体二〇〇〇円



平成三十年は「明治」改元から満百五十年にあたり、この「明治百五十年」を記念するため、政府は関連施策を展開したほか、各地でも特色あるさまざまな記念の催し物が行なわれた。「明治維新」（御一新）が何であったのかを考え直してみると、さまざまな動きや流れがあり、それぞれに興味を持っているが、その原点であり中核となるのが、「五箇条の御誓文」であることは衆目の一致するところであろう。本書は、日本法制史研究の第一人者である所功氏が、「五箇条の御誓文」に関する重要史料・基本文献を集成し、周到な解説を施したもので、専門の研究者のみならず一般の方々にも、「御誓文」について、より深く広く学び考える手懸り」となるように編集されたものである。本書には、『明治天皇紀』慶応四年三月十四日条、『太政官日誌』などから御誓文関係の史料をまとめた「五箇条御誓約奉対書」関係史料、「御誓文大意」と『御宸翰大意』、金子堅太郎・寛克彦・杉

浦重剛・平泉澄による講演や論説のほか、『昭和天皇実録』から、昭和二十一年元日に換発された「新日本建設に関する詔書」が収録されている。とりわけ『御誓文大意』と『御宸翰大意』は、明治初期の大教宣布運動に関連して出版されたものであるが、これまで殆ど知られることのなかったものであり、御誓文の趣旨を教導職がどのように理解していたのかを知ることができる貴重な史料である。また単に「天皇の人間宣言」とだけ知られている「新日本建設に関する詔書」が、実は「五箇条の御誓文」によって今後の国家の進路を示し、その主旨を体して「新日本ヲ建設」すべきことを説いていることなどが、改めて確認できる。三十五頁に及ぶ編者解説では、「五箇条の御誓文」の成立と普及の過程を巨視的に概観している。このように関係史料が一冊にまとめられた意義は大きく、今後、「五箇条の御誓文」研究の基本となるべき貴重な資料集成である。

小林宣彦著

紹介

『律令国家の祭祀と災異』

吉川弘文館 平成三十一年二月 A5判 三五二頁 本体一一〇〇円

「あとがき」で、本書の構想は「古代祭祀の本質は自然災害に向きあう社会の必須事項である」という視点が基になっている」と述べられている。著者は大学院生時代から「古代祭祀を支配構造に組み込む諸論」に対し疑問を感じ、師である岡田莊司國學院大學名誉教授の学会発表からヒントを得て「自然災害を神の祟りと捉えた古代の価値観が、体系化され、国家祭祀の成立につながった」という基軸となる構想が生まれたと語る。

本書では、以上の構想を踏まえた上で、古代の祭祀構造を明確にし、七世紀から八世紀にかけての律令国家祭祀の成立・制度化の過程を明らかにしている。三部構成で、第一部では災異と古代神祇祭祀の関係を考察、「災異Ⅱ神の祟り」であり、祭祀はそれを鎮静化し共同体を保全するためのものである事を証明しようとしている。さらに仏教や天命思想に基づく儀礼と神祇祭祀との関わり、神仏習合などの思想的背景にも目配りしている。

第二部では、災異と律令国家祭祀の成立について主に検討を加えている。「神郡」の成立を取り上げ、律令国家にとって国家祭祀は国土保全のための行政的事項であったことが論証されている。また、神階奉授と幣帛の同一性性格にも言及されている。第三部では、国家的な規模と一国単位では、同一神社で執行される祭祀であっても性格が異なり、国家行政と国司行政のレベルでそれぞれがリンクしている二重構造について述べられている。また、神社管理の問題、「神社の清浄」がどう要求されたか、同一神社において「祭祀者」が異なる場合などを考察することで神社の多重構造的な性格を解明している。本書は律令国家が支配構造を確立する過程とリンクして「古代祭祀」も確立するというある種イデオロギー色の強い見方に対して、「災異Ⅱ神の祟り」の鎮静化・共同体の保全と「古代祭祀」の確立という新しい歴史観を史料から論証しようと試みた意欲的な論考である。



齋藤公太著

紹介

『神国』の正統論―『神皇正統記』受容の近世・近代―

ぺりかん社 平成三十一年三月 A5判 三五二頁 本体六四〇〇円



南北朝時代に、北畠親房によって著された歴史書『神皇正統記』。この有名な歴史書の解釈を軸とし、中世から明治期までの解釈・受容史の展開を辿るのが本書である。大日本帝国憲法の起草にあたり、「しらす」と「うしはぐ」の区別について、井上毅は補佐役の小中村義象に示唆を得ているが、それらの概念区別は本居宣長の「古事記伝」でなく、むしろ中世神道を背景とする『正統記』に依拠していることを、本書は指摘している。本書が目指す中心的意義は、時代や受容者ごとの『正統記』解釈の多様性に着目しつつ、「解釈の変化」という視点から総合的な再検討を試みる」ことにあると、序論で述べられている。本論では、まず『正統記』が南朝の「正統」を証明するというより、北朝は足利政権による「偽王朝」であり、足利政権に対する本来の朝廷の正統性を弁証するものとして書かれたという前提が置かれている。その「正統」は三種の神器の継承、君臣関係、統治規範など多面的な

概念を含んでいた。南朝の事実上の敗北以降、中世の写本では北朝を正統とする改竄が見られるなど、現実に対していかに「正統」を考えるべきかという課題が浮き彫りになってくる。徳川時代、学問の正統とされた儒者から山鹿素行と新井白石が取り上げられ、そこでは武家の君臣関係、統治者たるものの「徳」を念頭に置きつつ、幕府と朝廷の關係に合わせて現実追認的に、『正統記』が受容されたことが指摘されている。崎門学を経て後期水戸学に至り、三大特筆の一つとして神器正統論によって根拠づけられた南朝正統論が主張された。しかし、水戸学内部でも神器正統論をめぐる解釈の違いがあったが、そこには考証主義的な視点からの『正統記』や垂加派教説を超克する批判が含まれており、その解釈の相違は「両者の対立は日本の本来性をめぐる解釈の相違だった」と高く評価されている。神道思想史に関心がある諸兄には必読である。

岡田莊司著

紹介

『大嘗祭と古代の祭祀』

吉川弘文館 平成三十一年三月 四六判 三四六頁 本体二八〇〇円



宮中祭祀の最重要儀式として古代より続く、天皇一世一度の皇位継承儀礼「大嘗祭」の本義とはいかなるものであるのか。この問いに答えるべく、本書は御代替わりを直前に控えた平成三十一年三月に刊行された。序文にあるように、本書の第一部「大嘗の祭り」は、岡田莊司『大嘗の祭り』（学生社、平成二年十月）の再録である。三十年近く前に刊行された『大嘗の祭り』は「平成大嘗祭論争」における中心学説とされた経緯がある。本書は折口信夫の「寢座秘儀説」に実証的批判を加えた画期的成果と、その後の研究成果を集めたものである。

折口「寢座秘儀説」とは大嘗祭の中心儀式は真床覆衾の秘儀にあるとした説である。著者によればこの折口説が与えた影響は巨大であり、先帝遺骸同衾説（洞富雄）や聖婚儀礼説（岡田精司）などの折口垂流の諸説もあらわれ、大嘗祭に関する議論は混迷を深めていった。本書にあるように、そもそも折口学説の中心は「マレビト」

論、「ミコトモチ」論であるが、折口が「寢座秘儀説」を唱えるに至り、戦前の折口学説は「天子即神説」と「天子非即神説」が交錯するに至ったとしている。しかし、戦後折口は「天子非即神説」へ軸足を移しており、著者は「その時点で、大嘗祭マドコオフスマ論は折口説ではなくなったというべきであろう」と述べている。それにもかわらず、「寢座秘儀説」のみが折口説のハイライトとして脚光を浴びる状況が現在まで続いているとしている。それに対して、「寢座秘儀説」の幻想を打ち払うべく大嘗祭が天皇による天照大御神の御饗である事を歴史学文献検証により明らかにし、さらに天皇祭祀の真義が収獲への感謝のみならず、災害列島日本における災異現象への対応の歴史にもあるという新たな大嘗祭論への視角を提供している。およそ大嘗祭について詳しく知りたい人全てにとって、必読の文献である。

島蘭進著

紹介

『神聖天皇のゆくえ―近代日本社会の基軸―』

筑摩書房 平成三十一年四月 四六判 二八八頁 本体一八〇〇円



著者は、「天皇が神聖な存在として人々から崇敬されるようになった歴史を可視化したい」とまえがきで述べている。つまり、近代日本の宗教的基軸である「国家神道」の議論には「宗教」や「神道」の定義の違いから、議論がかみ合わないことも多いため、「可視化」された見取り図のために「天皇」神聖化の過程を歴史的に考察すべしということになる。そして、本書は「神聖天皇の社会史」の見取り図を描いたものであると著者は語っており、その背景には『国家神道』の著者村上重良の近代日本宗教史的な見取り図の影響も垣間見ることができ、

強化の体制であるとみている。「祭祀」として位置づけられた「神社神道」と「皇室神道」は、他の諸宗教の上に君臨しており、他宗教は「祭祀」に服する限り信教の自由を保障されたとし、「実質的に諸宗教が皇道・治教に協力」し、「天皇崇敬に服さざるをえない体制となっていました」と述べている。「第三章 四節 天皇の軍隊の精神主義」では、昭和期に東条陸軍大臣名で出された「戦陣訓」などを例に、神聖天皇を中心とする国体を守るため、兵士の命が軽視されていく傾向について述べている。強制された国体論や天皇崇敬は徐々に内面化されていき、「天皇賛美になびく宗教指導者や学者」などの有識者も取り込んでいく。また、宗教運動・大衆運動も国体論を取り込んでいくことになり、精神的動員体制は歴史が進むにつれて確立していくとの見取り図が描かれている。概説的一般書ゆえの歴史的経緯の単純化の側面は否めないが、当時の歴史を把握する入門書としてわかりやすい。

島蘭進著

紹介

『明治大帝の誕生―帝都の国家神道化―』

春秋社 令和元年五月 四六判 二四四頁 本体二〇〇〇円

「国家神道」という概念を如何に規定するのか。従前、学界に於いて活発な議論が交わされているテーマである。本書の著者島蘭進氏は、これまで「国家神道」が戦後も存続している、との独自の見解を明らかにしてきた。著者に拠れば、「国家神道」とは、「祭政一致の理念の下、天皇の祭祀を最上位に位置づけ、伊勢神宮以下の神社神道祭祀を国民国家統合の精神基盤としようとする体制」と規定され、かかる体制は幕末維新期に創出されたと主張される。本書は、かかる「国家神道」の確立期を、「日露戦争から明治天皇の死へ、そして明治神宮の創建へと進む時期」に見出すものであり、かくして「神聖天皇崇敬の深まり」と共に「国家神道がどのように国民に広められたか」を分析することを課題としている。つまり、日露戦争以後、明治天皇御不例に伴う二重橋における御平癒祈願、明治天皇の崩御、乃木將軍の殉死、明治神宮の創建といった出来事の経過に、国家神道、就中天

皇崇拜の確立過程を論証するものである。なお、本書を特徴づける着眼点として、「群衆」という概念を挙げられる。それは、「国民国家統合の精神基盤」としての「国家神道」が上述の出来事を通じて、群衆（の心理）によって育てられたとみるものである。ちなみに、「群衆を嫌悪する個人であったはずなのに、いったん群衆のなかに入ってしまうと個人としての理性的な思考はもう消え去っている」との言説からも明らかのように、著者は、国家神道をして非理性的な潮流と捉えているのであろう。それはともかく、本書は、明治神宮創建の背景、あるいは氏の指摘する「天皇崇敬」や「国家神道」の確立過程を、一般読者を対象として平易に説いている。本書を通じて、「国家神道」理解の一事例を確認できよう。



安江和宣著

紹介

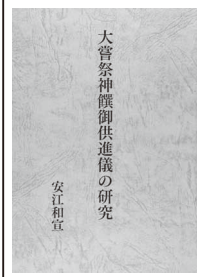
『大嘗祭神饌御供進儀の研究』

神社新報社 令和元年五月 A5判 二五四頁 本体二五〇〇円

皇學館大学名誉教授の著者が「大嘗祭の薦享」についての研究成果をまとめて公刊したのが本書である。昨年、年号が平成から令和へと改元され新しい御代が始まるにあたり、「大嘗祭の意義の理解」に資することを期して本書は刊行された。本書に収載された論文は、「元の印刷のままとし、加筆や字句の修正は行わず収めた」とのことである。

神饌御供進に関する根本史料は『貞観儀式』と『延喜式』であるが、天皇と采女による具体的な神殿への御供進の態様については記されておらず、まず著者は大江匡房『江家次第』や鳥羽天皇の大嘗祭を記した『江記』（天仁大嘗会記）、より後世の『大嘗会神饌仮名記』などを用いてその詳細な式次第を明らかにしている。また、崇徳天皇の大嘗祭の記録である『法性寺殿御次第』と『法性寺殿御記』の記事を比較しつつ、両著の成立時期とその前後関係を探求している。第六章「大嘗祭に於ける神饌御供

進の御儀——『建保大祀神饌記』の成立をとおして」では、内容的に似通っている『建保大祀神饌記』と『伏見院御記』の相違点を挙げ、田中初夫博士と大野健雄氏のそれぞれの説に対して、史料に基づいた反論を加えている。第七章「『釈日本紀』と大嘗祭——特に「神代巻」の問答について」では、一条家の人々と卜部兼文との間でかわされた有名な問答に関して、著者は「何の為に、何の目的があつて「神代巻」の問答がなされたのか」の研究はまだなされていないと問題提起をし、従来の有力な考え方である「神代巻」の問答と神饌御供進の習礼を関係づける説を継承しながら問答が行われた時期を限定している。本書は「大嘗祭の神饌御供進儀」に関する史料に基づいた実証的な研究成果が中心であるが、「宮主の職掌に関する一考察」、「平居瓶（ひらいがめ）考」、「天神の寿詞奏上における「賢木」の意味」などの章では周辺の分野にも研究は及んでおり、今なお新鮮さを失っていない。



平藤喜久子著

紹介

『いきもので読む、日本の神話―身近な動物から異形のものまで集う世界―』

東洋館出版社 令和元年七月 四六判 一六〇頁 本体一六〇〇円



本書は、古事記、日本書紀、風土記などの神話のなかから生き物が登場するエピソードだけを集め、誰にでも古典に親しみやすいように工夫された作品である。本書は、第一章 陸のいきもの、第二章 水のいきもの、第三章 空のいきものと分けられているが、さらに「神の姿」として蛇、鰐、龍、鵜、「神の味方」として兎、鹿、「人の味方」としてカラスなどが分類されている。それぞれにあらすじが紹介されており、すっきりと頭にストーリーが入ってきて理解がしやすい。また、より深く神話の世界を学習したい人のために、エピソードの主要な部分を抜粋して原文が掲載されており、親切である。よく知る身近な動物と神様や人間の物語は、ストーリーが飲み込みやすく、また実在しない動物に関わる話も、想像を掻き立てられて読み進むことができて、非常に面白い。国学者の本居宣長は『古事記伝』で、「カミ」について「凡（すべ）て迦微（かみ）とは古御典（いにしえのみふ

み）等（ども）に見えたる天地の諸（もろもろ）の神たちを始めて、其を祀れる社に坐す御霊（みたま）をも申し、又人はさらにも云（い）はず、鳥獸（とりけもの）の本草のたぐひ海山など、其与（そのほか）何にまれ、尋常（よのつね）ならずすぐれたる徳（こと）のありて、可畏（かしこ）き物を迦微とは云なり。すぐれたるとは、尊きこと、善きこと、功（いさお）しきことなどの、優れたるのみを云に非ず、悪（あし）きもの、奇（あや）しきものなども、よにすぐれて可畏（かしこ）きをば神と云なり」と定義しており、本書に登場する動物にも「カミ」に該当する存在はあるのではないだろうか。本書は、古事記、日本書紀、風土記など本格的な古典に入門するきっかけとして非常に優れており、イラストレーターのホリナルミさんによる挿絵も、ノスタルジックで味わい深いものになっている。古典に興味がある方に広くお勧めする次第である。

茂木貞純・佐藤健二編

紹介

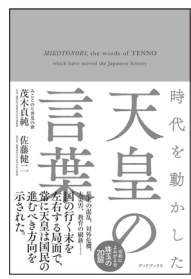
『時代を動かした天皇の言葉』

グッドブックス 令和元年八月 四六判 二九六頁 本体一八〇〇円

本書では、上皇陛下の「象徴天皇としてのお務めについて」のお言葉から始まり、昔へとさかのぼる形で、江戸中期の第一一六代桃園天皇の御沙汰書までの「みことのり」が取り上げられている。この約二五〇年間には、明治維新や第二次大戦などの未曾有の国難的な出来事があった。幕末の混乱、対外危機、大災害、敗戦などの国家存亡の危機を乗り越えるにあたり、日本には天皇を中心に団結して危機を打開してきた歴史があった。いつの時代も国の行く末を左右するようときは、天皇が先頭にお立ちになり、「みことのり」を発せられて国が向かうべき方向を国民に示されてこられたのである。内容は、それぞれの「みことのり」が発出された時代背景を示し、本文に語釈を加え、周辺の歴史も含めた解説を加えるといったものである。

昭和天皇の「みことのり」は五つ取り上げられている。昭和天皇は第二次大戦の終戦後の「年頭、国運振興の詔

書」（昭和二年一月一日）において、素案の冒頭に「五箇条の御誓文」を挿入するように指示されており、そこに日本はすでに民主主義国家であるとの大御心を窺うことができる。歴史的研究によりGHQから強制された詔書である側面が明らかになり、同詔書は俗に「天皇の間宣言」と呼称されているが、その俗称は実態に即しておらず誤りであることが本書で解説されている。天皇の神格を否定したのではなく、むしろこの詔書によって占領下でも国の誇りは保持されたというべきであることが解説されている。問題は天皇の本質にまで及んでおり、詳しい内容については本書にあたってほしい。新しい令和の時代が始まるにあたり、それぞれの時代の天皇の意思が凝縮された「みことのり」を拝読することにより、歴代の天皇の国の隆昌と国民の幸福を祈り、国民に寄り添ってきたお気持ちに接することができよう。広く一般にお勧めしたい。



藤田大誠編

紹介

『国家神道と国体論——宗教とナショナリズムの学際的研究——』

弘文堂 令和元年九月 A5判 五三六頁 本体七〇〇〇円

本書は、表題をめぐっての科研費共同研究に基づく成果論文集である。ちなみに、従前の「国家神道」に関する研究は、大凡二つの動向に分類される。一つは、神社、皇室祭祀、戦没者慰霊・追悼・顕彰等、文脈の異なる様々の要素に言及しつつ、「国家神道」概念を構成することを試みる演繹的方法である。一方、かかる方法では実証性に乏しいとの反省の下に為された歴史研究がある。それは、厳密な史料批判に基づく実証史的検討を踏まえ、上記の諸要素の相互関係を検討して近代日本社会の構造解明を目指すものである。本書は、後者の実証的な歴史研究に立脚するものである。もう一つ本書を特徴づけているのは、従前の研究では別個に展開してきた「国家神道」研究と「国体論」研究とを接続させる試みが為されていることであろう。かくして本書の目的は、「近代日本の宗教とナショナリズムをめぐる「知」の実態解明」という課題を設定し、かかる「知」の担い手たちの思想と

行動を検討対象とすることによって、あくまでも具体的な史料の検討に基づく実証的歴史研究を軸とした学際的再検討を試みるものであり、〈中略〉「国家神道」研究と「国体論」研究を有機的に接合し、新たな議論の方向性を提出する」ことなのである。本書は、第一部国家・神社・神道、第二部国民・教育・宗教、第三部国体・思想・学問の三部より構成されており、近代神道史・宗教学・日本近代史・建築史・宗教社会学・日本民俗学・日本教育史・日本思想史・日本政治思想史等を専攻する第一線で活躍する二十二名の中堅・若手研究者の論考が収録されている。近代日本の宗教とナショナリズムという課題を考える上で、極めて学際的な研究が実現していることを、本書第三の特徴として明記しておきたい。当該分野の研究に於ける最新のアプローチと成果とを示す重要書籍といえるだろう。



紹介

『皇室典範改正問題と神道人の課題』

神社新報社 令和元年十月 A5判 七一頁 本体五〇〇円



平成十七年の「皇室典範に関する有識者会議」で、皇室に女系・女性天皇を認める見解が示された。それに対して、神社本庁は男系継承の伝統保持の重要性について声明を出した。その後「皇室法に関する研究会」が開催され、成果は神社新報に在籍中の藤田大誠（現・國學院大學人間開発学部教授）が、同年七月から十月の十一回、本書名と同題名で神社新報に連載された。本書はその連載をまとめて、刊行したものである。

「皇統」と「万世一系」に関して、万世一系概念を史的に考察している（八回）。皇族とは何かにつき、かつて皇親と称されていた古代からの流れを追う（七回前半）。歴代の皇位継承は、直系・兄（姉）弟間、傍系等の類型を考察し、近現代を俯瞰（四回）。維新をきっかけに、宮門跡制度は廃止され、神仏判然を背景に、皇族は全て還俗。一代皇族制から永世皇族制との変遷を経る（七回後半）。側室と庶子の皇位継承制度はやめられる（十一回）。

が、女系・女帝は皇室典範で否定された。井上毅の「謹具意見」を含め、我が国古制研究の重要性を指摘し（三回）、近世の養子と猶子と現行養子禁止規定との差異（五回）、皇嫡制度の適否についても言及されている（九回）。終戦後、日本は占領軍の下に置かれ、占領下のもとに昭和二十一年十一月、伏見宮系の十一宮家が臣籍に降下した。旧皇族の皇籍復帰につき「広範かつ具体性を持った論議」が求められると主張している（六回）。諸外国の王位継承制度についても触れている（十回）。

平成十八年九月六日、悠仁親王殿下の御誕生により、皇室存続を名目とする「女系・女帝」の導入の動きは一旦途切れることになるが、それを企図する勢力は依然として健在である。平成から令和の御代替わりを経た今、皇室の今後と伝統護持について「神道人の課題」を考えようとするとき、本書には必要不可欠な事項が原資料も含めて収載されており、有志諸兄にお勧めする。